

決して屋上屋を重ねたようなものではない。「門人」「学系」の分野に筆の及んでいぬ点、後進への親切をいささか欠くかと思われるが、ともあれ、時宜を得た撰文ではあった。

○『日本陽明学派の人々の書』

平成九年十月、学校法人二松学舎発行、明德出版社発売。

B5版、一二〇頁。

本書は、前掲『陽明学論叢』と同様の趣旨によって編まれた冊子。二松学舎千代田校舎と湯島聖堂を会場に、この時期、記念行事の一環として、『日本陽明学派遺墨展』が催されたが、その図録ということである。中江藤樹の『致良知』をはじめとして、熊沢蕃山・北島雪山・三宅石庵・三輪執斎・中根東里・佐藤一斎・大塩中斎・吉村秋陽・山田方谷・林良斎・春日潜庵・池田草庵・西郷南洲・河井継之助・吉田松陰・三島中洲・東沢瀉・山田済斎・安岡正篤と並ぶ墨跡は聚って八〇頁に及び、一葉ごとに刮眼せずにはおれぬ上質のもの、是非一度手にして鑑賞されたい。巻末に「日本陽明学派の人々略伝」及び「作品目録」を付し、各人の事蹟・作品ごとのヨミを示した点もありがたい。

本冊子は併せて解説論文をも収める。福田殖Ⅱ王陽明の「良知」説の特色、疋田啓佑Ⅱ「客座私祝」について、寺山葛常Ⅱ日本陽明学派の人々の書、松川健Ⅱ東沢瀉の生とその書、中田勝Ⅱ二松学舎の陽明学―方谷・中洲・済斎、の五本。中に就いて寺山葛常(旦中)氏は、本冊子の監修者として御労苦があった。なお、編集委員代表、大畑茂雄氏の「編集後記」によると、資料の提供先は、個人・機関を合わせて三六の多さを算える。実務に当たっ

た編集委員の御労苦もまた俾ばれる。総じて、学舎の理事長、小林日出夫氏の指導宜しきを得て成った好企画であった。

(以上、松川)

○岡田武彦著『王陽明紀行―王陽明の遺跡を訪ねて―』

平成九年八月、登竜館発行、明德出版社発売。

A5版、四二七頁。

本書のサブタイトルに王陽明の遺跡を訪ねてとあるように、岡田武彦氏を中心とする陽明学研究に関係のある人々の、昭和六十年八月から平成八年十一月に至るまでに行われた6回の探訪の記録である。

第一章 夢は江南へ(昭和六〇年八月、第一回)

王陽明の生誕地であり、講学処(中天閣)のある余姚市、王陽明の墓地や旧居跡のある紹興市、ほか無錫、蘇州などを巡遊。

第二章 再び王陽明の遺跡を訪ねて(六二年十一月、第二回)

王陽明の墓碑の再建計画を持って余姚へ。陽明の生まれた瑞雲楼の居跡。紹興の要人と墓碑の再建の検討。

第三章 竜場訪問と陽明墓の除幕(六三年三月、第三回)

王陽明の左遷された竜場の陽明洞、王陽明墓碑修復の除幕式、その後、陽明学国際学会。

第四章 陽明晩年の遺跡探訪(平成四年四月、第四回)

王陽明が晩年、寧王宸濠の反乱や少数民族の反乱を鎮撫するため遠征した広西省の思恩、田州などの遺跡。遠征の帰途、急逝した青竜鋪。この地には、後年(一九九四年)落星碑が建てられた。

第五章 瑞雲楼の修復と陽明洞再訪(平成八年、第五、六回)

この記事は短い。岡田先生の「慶瑞雲楼重建文」「王文成公像贊」の2文が中心。

本書は王陽明の事跡をたどりながら、彼の伝記を明らかにし、また訪れた地方の文人詩人などの事績も尋ね説明し、写真も多く親しみやすく分かりやすい、王陽明の案内書でもある。

○安岡正篤述『王陽明』

平成九年十一月、安岡正篤先生生誕百年記念事業委員会発行、黙出版発売。B6版、二〇六頁。

本書は故安岡正篤氏生誕百年を記念して刊行されたもので、昭和四十六年九月の関西師友会における講演、同先哲講座および四十九年一月から十二月に至る「照心講座」を編集して活字化したものであるが、内容は王陽明の伝記に安岡氏自身の経験にもとづく欧米の思想との比較や、現代中国における考え方や評価をも交えて王陽明の生涯を分かりやすく描いている。

安岡正篤は東京大学を卒業したその年に名著『王陽明研究』を刊行していることから想像されるように、陽明学に造詣は深い。しかし単なる研究者でないことは、本書のはしほしに現れている。例えば陽明の「五溺」のところで、「知性はこれに解決を発見しようとする。しかし知識や理論の容易に及ぶところではない。ここが大事なところでもあります。思索・学問・信仰など千怪万怪きわまりないが、そもそも知性というものの魅力は、一つの安易性、イージネスにある。それは現実の限らない複雑性に代えるに、解積という都合のいい分析や総合を試み、生という惑いに充ちた現実に対して、簡単な答案を書くことである……知識や理論を組み

立てるほうが、実は比較にならないほど簡単で容易なことなのである」(P61)と述べて、研究による知識の上での解決よりも現実における実践こそが難しく重要であるとして説いている。

ついでに言うところ明王朝の開国創業の英主である太祖朱元璋と毛沢東やスターリンとの比較、燕王・棣(後の永楽帝)の王位篡奪に際して、その先導を果たした袁珙の観相から安岡氏自身の経験(P83-87)など、面白いエピソードをまじえながら、王陽明の生き方に、自分の生き方考え方をダブらせて描いていて、氏の『伝習録』(中国古典新書)の解説部分を分かりやすく語ったものといえよう。

○林田明大著『真説陽明学』入門』

一九九四年十月、三五館刊。B6版、三九八頁。

第一部 王陽明の生涯

第二部 陽明学の思想

第三部 日本陽明学派の系譜

本書の著者は、陽明学京都会議の実践部会の報告者で、陽明学の実践者ルポなどの仕事もあり、それとともに本書のような入門書を書くような啓蒙的な研究者でもある。従って陽明学に関する過去の研究成果を網羅的に踏まえて咀嚼したものが遺憾なく発揮されている。

王陽明の生涯では、『王陽明出身靖乱録』などの、やや小説仕立てのような作品からも挿話を積極的に引いて読みやすく、また興味を引き起こすように描いている。次の思想に関しては、西洋思想に培われた現代人に分かりやすくするためか、クリシュナム

ルティ・ゲート・シュタイナー等の思想と比較し、またその類似性などで説明し、現代的な意義にまで説き及んでいる。そこには陽明学研究の専門家から異議を挟まれるところがあるかと思うが、それはともかくとして読ませる説得力と面白さがある。最後に日本の陽明学派の系譜について述べているが、そこには著者の博覧が披瀝されている。陽明学と少しでも関係ある人は、全てと言っているほど広く網羅されている。説明が羅列的表面的とはいえず、そこにはこれまで問題にされていなかった人々も多い上、ちよつと挟まれたエピソードから新たに興味を引き起こさせるものがある。

最後に一つ注文をつけておきたい。それは本書の最初のところ(p16)で、「陽明は名を守仁、字伯安、諱を文成という。：諱とは諡ともいい、死後に尊んでつけた称号である」というところは、「諡を文成という」と改め、「諱云々」のところは、日本においてはそのような例もあり、『広辞苑』の諱の項の③にはそのように説くが、王陽明にはあてはまらない。ここは「諡とは死後に尊んでつけた称号である」と改めてほしいところ。王陽明の諡については『明史』(卷一九五)の王守仁伝、王陽明の『年譜』にも、隆慶初年、また元年に、「詔贈新建侯、諡文成」と記載されている。この件については、『財政の巨人―幕末の陽明学者・山田方谷』のP二二にもあるので指摘しておきたい。

もう一つ、日本の陽明学派の系譜の中の、池田草庵の箇所の、「草庵の門人には」とある中に、「陽明学者東沢瀉(ここの瀉を瀉に誤っているのも注意)、儒者楠本碩水」を入れているのは少

し行き過ぎであろう。池田草庵には「門人録(立誠舎名籍・青箱社名籍)」というのが残っており、そこに門人は記載されているが、この二人は入っていない。年が十余歳若く、いろいろ質問してはいるが、草庵は門人として扱っていないので。その他にも専門の研究者が見ると首をかしげたくなるような点があるかもしれないが、ここに述べたような小さなことによって本書の評価を云々するつもりはない。この書を読むことで、現代に生きる陽明学の心を味わい、生かしてほしいし、これを契機に陽明学への関心をもっていたきたいのである。

同じ著者に『財政の巨人―幕末の陽明学者・山田方谷』(一九九六年十二月、三五館刊。B6版、二八六頁。)というのもある。今日、経済不況に喘ぐ時、リストラの先駆者としてよく問題にされるのが米沢藩主の上杉鷹山公であるが、幕末の陽明学者山田方谷もその面で鷹山侯よりも傑出した人であることを説いている。

方谷については前号の「陽明学だより」に、矢吹邦彦著『炎の陽明学―山田方谷伝―』(明德出版社)をあげていたが、この書の著者矢吹氏は、方谷の娘小雪の嫁いだ矢吹久次郎の子孫三郎の曾孫である。従ってそこに伝わる方谷と久次郎との間に交わされた百二十通余の書簡から何通かを繕き、それらをも交えて山田方谷像を描いたもので、従来知られなかった面もある、A5版四四五頁の大著である。(以上、疋田)